

月に映る瑠璃紅色

エンゼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある女の子達が頑張るお話。

九 八 七 六 五 四 三 二 一

| | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

52 48 43 32 24 20 16 6 1

目
次

『涼月瑠璃』はとある学校に通う中学三年生の女の子である。大人しくて清潔、成績優秀の優等生だ。運動が苦手という欠点もまた可愛らしくてよろしい。

そんな瑠璃の特徴といえば、やはりその瞳だろう。日本人にしては珍しく透き通った青色をしているのだ。それが名前の由来でもあったりする。髪の毛も殆どが黒ではあるが、一部だけ黒にかなり近い色をした青が混じっている。

——おや、どうやら彼女のクラスの次の授業は体育らしい。

生憎にも天気は雲一つ見当たらない快晴。瑠璃にとっては地獄でしかないだろう。

そう、瑠璃ならば。

「…… うん、お願いね。『コウ』」

そう言った瑠璃はその場で目を瞑る——5秒くらい瞑った後、彼女は目を開けた。その瞳は先程の透き通った青色ではなく、透き通った赤色。心なしか髪の毛も一部が赤色に変色していた。

「…… ああ、運動はオレに任せな。『ルリ』」

ニヤツと笑った『コウ』と呼ばれた彼女はそのまま体育に向かっていった。

これは、こんな『涼月瑠璃』の物語である。



私、『涼月瑠璃』にはもう一人の私がいる。一人称は『オレ』で『コウ』と名乗る人格が。そう、私は所謂二重人格だ。

私がこのコウに気付いたのは5歳の時。その頃私は孤児院にいたんだ。この『瑠璃』って名前はその院長さんがつけてくれた。まあ、そこでとある人からいじめられてたんだよね。その人は同じ孤児の子で、自分の親がないという劣等感から私をストレスの捌け口にしてたらしい。当時の私はそれが怖くて怯えることしか出来なかった。でも…ある日私の中から私じゃない声が聞こえてきたの。

『…辛いだろ？苦しいだろ？ならオレと変われ。なんとかしてやる』

思わず誰？と辺りを見渡したけど誰もいなかった。すると、また聞こえてきた。

『オレは… そうだな、「コウ」とでも名乗ろうか。まあ、難しいことは考えなくていい。とにかく、今を変えたいか？変えたいならオレと変わってくれ』

院長さんにも職員さんにも相談出来ずに溜め込んでいたから、藁にすがる思いで変わりたい、と言った。

『よし、ならオレと変わりたいと思いつながら目を瞑ってくれ』

それに従って目を瞑っていると…何か起こった気がした。それを例えることは出来ない。実際経験しないとこれを説明するのは無理だつて分かるはず… まあ、そんな人いないんだけど。

『… あれ？』

別に意識を失ったわけじゃないし、寧ろはつきりしてる… けど、身体が動かせない。感覚とかは共有してるのに身体だけ自由に動かせない。

「ルリ？聞こえるか？」

聞こえてきたのはコウの声。だけど、私の声でもあった。

「ま、見とけ。悪いようにはしないさ」

——そこからはすぐだった。コウが院長に相談してくれて、引き取り先を見つけてくれて私は… いや、私達はその引き取り先へお世話になることになった。ちなみに、私をいじめてた人のことも報告して

くれて、孤児院を出る直前に謝ってくれた。そこで理由も聞いたよ。コウがそれについてめちやくちや怒ってくれて、何故か嬉しくなったんだよね…

その後、ちゃんとコウは身体を私に返してくれた。正直、返してくれないんじゃないかって思ってたから怖かったから安心した。

でも、ある日気になって聞いてみた。

「ねえコウ…なんで、ここまでしてくれたの？」

少し黙って、困ったようにコウは言った。

『なんでってなあ…わからん。ただ、「ルリはオレが守らなきゃ」って思うんだ。それだけだよ』

私はそこで笑ってしまった。大爆笑だ。だって…そんなクサイ理由だとは思わなかったから！

『わ、笑うなあ!!』

そして色々あつて生きてきて、コウの特徴が掴めてきた。私と違って勉強は全然出来ないけど、代わりに運動ができる。性格は運動部活動生みたいで活発的。だけど私と本とか漫画とかの趣味が一緒に親近感を覚えた。コウも私なのにね…でも、どっちかって言えばお姉ちゃんって感じがするなあ…みたいなことをコウに言ったら

『オレも確かにお前のことは可愛い妹のように感じてる』
って言われた。何故か悲しくなった。

そんな私達は今学校から下校中。先生からもらった進路希望調査が今日の課題なのだ。

「うーん…どうしようかなあ…」

『この辺りの高校はしっくりこないのか？ルリの成績なら余裕だろうに』

「そうかなあ…でも確かにしっくりはきてないかも」

『県外の高校も手だぞ？とりあえず帰ったら高校調べしてみようぜ！』

「…そうだね。そうしよつか！」

私はまだ見ぬ県外の高校というものに心を弾ませながら家に向かう。

どうせなら漫画みたいな青春送りたいよね… 伝説の下校中の買い食いとかもしてみたいなあ… バスや電車通学も少し憧れるよね！フフツ、楽しみだなあ！

『… おいルリ、気を付けろ。何かに後を付けられてる』
「え？」

思わず振り替えると、一人の男性がいた。顔つきは鋭くて、かなり背が高く、体格もすごい。あれラグビー部の人ぐらいあるんじゃないか。いや、そうでもないや。

「… あの。少しお時間よろしいでしょうか」
考えてたら、いつの間にかその男性が私達の目の前に来ていた。

『… 辺りに人はちらほら。最悪叫べば助けは呼べるな』
何考えてるのコウ。まあ確かにこの人怖いかも… でも、不良とかそんな感じの気配はしないかな。スーツ着てるし。

「構いませんが… 手短にお願いします」
『お、おいルリ!』

「ありがとうございます。あまりお時間は取らせません」
するとその男性はスーツの右の胸ポケットから小さめの紙を取り出して私に差し出した。

「私はこういう者です」
「… 美城プロダクションの… 武内さん？」
『やべーやつだつてルリ!!はやく逃げる!!』

コウの指示は無視して、私は武内さんに貰った名刺を見つめる。
美城プロダクションが何かよく知らないけど、私達に何か用があるのかな？

「… あの、アイドルに興味ありませんか？」

『… はい?』

ここから、新たな知らない風が吹き始めた気がした。

「アイドル… ねえ…」

結局あの後、考えさせてくださいという断る決まり文句みたいなやつで武内さんから逃げてきた私達は家に帰宅した。

今のお父さんとお母さん… というか、引き取ってくれた夫婦にそう呼んでと言われてるんだよね。恥ずかしいったらありやしない… あ、話が迷子になっちゃった。まあ、お父さんお母さんは共働きだから家にいるのは私達だけ。9時ぐらいまで1人だ。

… アイドル… かあ…

『… 一応名刺はもらってしまった訳だしな。その会社がホントにあるか調べてみようぜ』

「もう嘘って感じはしないけど… 一応見てみよっか」

パソコンを開いて『美城プロダクション』と検索をかけてみる。するとびっくり、超絶大手のプロダクションであることが判明した。

テレビとかあんまり見ない私やコウでも分かるような俳優さんや女優さんが所属してるのを見て… もう言葉が出なくなっちゃった。

『… マジである会社なんだな。なら尚更不思議だ… なんでこんなところにその社員がいて、なんでルリがスカウトされちゃったんだろうな』

「た、確かに…」

コウの反応に一部おかしなところがあったような… とりあえず置いておこう。

でも、私達がスカウトされちゃったことは覆せない事実。今考えるべきなのは… この話を受けるか受けないかだ。

『… ルリとしては受けたいんじゃないか？まだ小さいときにアイドルに夢中になってた時期があっただろ？』

「そ、それは本当に小さいときの話だよ！… それに、コウはどうなの？」

『ん、オレかー？…………… まあ、興味がなかったって言えば嘘になるな』

照れるようにして話すコウ。可愛い。

… オホン、とまあ私達は興味があるわけなんだね。けどそしたらこの地元離れなきやいけないわけだよな。この会社東京にあるし… 東京かあ… 遠いなあ…

『ま、仮にアイドルになるとしたら、オレの存在は隠さないといけないな』

「… え？」

『だってそうだろう？基本オレの存在は周囲の人に隠してるしな』

そうだった、コウのことは学校の友達にもお父さんお母さんにも隠してるんだった… だからコウは体育のときでも周囲には私っぽく振る舞ってる。かなり違和感あるけどね…

で、でもそれは…

「それはコウが言ったからで…」

『ルリが周囲から変なやつ認定されてほしくないからな。アイドルになるとしてもルリが変なやつって思われないようにオレを隠すべきじゃないのか？』

「……………」

… ほら、出たよ。コウはいつも私を優先する。たまにはわがままとか言ってもいいのに… コウも私なのに…

「… まあ、それは後で考えようよ。今は受けるか受けないか… だね」

『あー… そうだな。んで、どうするよ』

コウもやりたくないわけじゃないし、私もどっちかって言えばやりたい。なら決定はしてるわけだけでも…………

「問題はお父さんお母さんだよねー…」

『… そういや、かなり過保護だったな。あの二人』

そう、私達が孤児院からこの家に引き取ってもらったときからなんだけど、お父さんお母さんは物凄く過保護。それは私達が初めての子

供だから…なのかな。どういうわけか、お母さんの体は子供が作れないらしい。だからなのかもしれないね。

でも、それでもお父さんお母さんが私達にくれる愛情は本物だ。本当に感謝しても仕切れないよ…

… まあ、そこが欠点なんだけどね。

「仮にアイドルやりたいって言っても…お母さんはいいとして、お父さんは賛成してくれるかなあ」

『反対…されるだろうな。あの人は芸能界に携わってるしな』

ま、とある雑誌の会社なんだけどね。そこまで大手じゃないけど。でも時々、芸能人の特集とかしてるから…多分芸能界には詳しいはず。だからそれに関してなんか言われそうだなあ…

お母さん？ああ、あの人は『貴女の人生、好きに生きなさい。どんな結果になろうと全力でサポートするから』というめっちゃいい人だから。

——もうちょっと考えてみようかな。まだ…まだやるって決めたわけじゃないし、私達をスカウトした理由も気になるし…

「…コウ、コウは…アイドルってどう思う？私じゃなくて、コウ自身ができるって考えてみて」

『んー……難しいな… まあ、楽しいとは思うが…』
そっかあ……

○○○

考えに考えてみて——次の日が来てしまった。

いつものように過ごそうとしてもゼーんぜん授業とかが頭に入っ

てこなくて…… 気付けば放課後に。

——今日の課題?…… ああ、確か忘れましてーって言いに行つたと思う。凄く珍しそうに見られたけどね…… だって調べ損ねちゃったし…… 仕方ないね。もしかしたらだけど…… 昨日のやつは全部夢だった可能性あるよね。うん、そうじゃなきゃ私達がスカウトされる理由が無いし…… うんうん、そうだよ。きつとそうだ。

「……すみません、お時間宜しいでしょうか」

…… 夢だけど、夢じゃなかった。

「…… 大丈夫です武内さん。私達のほうもそう思っていましたし」

『お、おいルリ?』

「私『達』?…… まあ分かりました。では、立ち話もアレですのであちらの公園のベンチに」

私達は武内さんの目線の先にあった小さな公園に行き、ベンチに座り込む。第三者から見れば一つのベンチに中学生女子とスーツを着た高身長男性が座ってることになる…… 彼らはどう感じるんだろう、と呑気に考えていた。

「あの、申し訳有りませんが…… お名前を教えてくださいませんか?」

「ああ、そういえば名乗ってませんでしたね。『涼月瑠璃』です。とりあえず、よろしくお願いします…… あ、出来れば名前で呼んで貰えると嬉しいですよ」

「はい、よろしくお願いします…… 瑠璃さん」

…… さて、そろそろ質問しようかな。

「あの…… なんで私達なんでしょう。周りから私達を見てもそこらにいる一般人と何も変わらないと思うのですが」

『「達」をもう使うなルリ…… 普段はそんなことしないだろ?』

コウ、黙ってて。私は今武内さんの答えを待ってるから。

武内さんはほんの少し間を置いて、真剣な目付きになってこちらを向き、言った。

「――笑顔、です」

「…え？」

「ですから、笑顔です」

「… ええ… 本気？ 笑顔だけで普通そこらにいる少女をアイドルにスカウトします？」

「貴女の笑顔は人を惹き付け魅力することが出来ると思いましたが。だから私は貴女をアイドルとして輝かせたい…これが理由です」

「… この人本気だ。ってあれ？… 私昨日笑ったことあつたっけ？」

『昨日帰つてるときに高校調べることに對してウキウキしてたろ？あそこで多分笑つてたんだらうよ』

あ、補足ありがとねコウ。

なるほど… 笑顔、笑顔ねえ… うーん… ちよつと納得いかないかも…

「… あの、すみませんがこちらからも宜しいでしょうか」

「ああはい。アイドルの件ですよ？ 私個人的には受けたいと思つているのですが…」

「いえ、勿論それもあるのですが… どうしても気になることがあります」

気になること？ それって私やコウでも答えられるやつなのかな？… うーん、思い付かないな。

「その、先程から言われてる私『達』とはどういうことでしょうか。差し支えなければ教えて頂きたいのですが…」

… あー。それかあ…

『おい、どうするつもりだルリ？ お前がドジったせいで変なことになつちまつたぞ？』

変なことって… まあ、寧ろ想定内だよ、コウ。

『… まぎか』

やっと気付いた…。まあ、もう遅いよ。

「武内さん。『二重人格』ってご存知ですか？」

○
○
○

瑠璃さんとの出会いは本当に偶然。私はここに出張として来ていて、その営業の帰り道で見かけたというものだ。その時の私は瑠璃さんのことが少しだけ気になり、チラツとなるべく自然な形で瑠璃さんを見た。その瑠璃さんは――

――物凄く可愛らしい満面の笑みをしていた。

これから私が担当するアイドル部門の新プロジェクト…シンデレラプロジェクト。『女の子の夢を叶えるプロジェクト』として上のほうからも期待をされているのだが、まだ肝心のメンバーが集まっていない。だから現在そのメンバーを探している状態だ。そんな時に見かけたのが瑠璃さんだ。

――この子なら、この笑顔なら、絶対に輝くアイドルになれる。私の中で何かを感じた。恐らくこれが所謂『ティンときた』なのだろう。

思わず私は声をかけていた。

『…あの、アイドルに興味ありませんか？』

『…はい？』

初対面としては、かなり駄目だったのではと今更ながら思う。：が、あれが精一杯であったと思う部分もある。

私は自他共に認める口下手だ。一度それが原因で……いや、今はそれは関係ない。とにかく、瑠璃さんから見れば私はとても変であったであろう、ということだ。

しかし私はそんなことはお構い無しでその概要について説明をした。あまり時間を取らせないために簡潔に、しかしきちんと内容がはつきり伝わるように……。それが良かったのかは不明だが、瑠璃さんの話を聞いてくれる態度はしつかりしていた。と同時に、アイドルに興味がありそうな要素もチラチラと見せてきていた。

だが、時々瑠璃さんが発する言葉に疑問が生じる点が多々あった。それは『私達』という言葉だ。最初はそういう一人称なのかと思っていたが、そのようではなく、本当に自分ともう一人いるような感じで話す。

結局その日は名刺だけ受け取ってもらい別れることとなった。予定表の滞在期間を確認したら、まだ十分に時間がある。明日のこの時間にまたここに来よう。そうすればまた会えるかもしれないから。そう決意し、とりあえず帰宅した。

そして次の日。昨日決意したように同じ時間にその場所に訪れてみると……。予想通り、瑠璃さんを見つけた。話をするために声をかけ、近くにある公園に誘導してみる。瑠璃さんは思っていた以上に乗り気で着いてきてくれた。

そこで私は名前を聞いていなかったことに気づき、名前を尋ねてみた。そこで変な顔をされるかと思ったが、瑠璃さんは普通に教えてくれた。珍しく瑠璃さんの方から名前呼びを推奨されてしまったが。

その後瑠璃さんは私に質問をしてきた。曰く、何故自分なのか、と。ここでも『私達』を使っていたが、その疑問を飲み込み答えることにした。

私は迷わず『笑顔』と答えた。その時の瑠璃さんの表情は困惑気味であったが、追々そこについては納得してもらおうこととしよう。

そして……。私はこのタイミングで瑠璃さんに質問をした。内容は

当然、瑠璃さんが多様していた『私達』について。もしかしたらただの杞憂かもしれないとも感じてはいたが、知的好奇心が勝ってしまっただのだ。

その質問に対して出てきた瑠璃さんの返答は――

「武内さん。『二重人格』ってご存知ですか？」

――疑問であった。

そこで私は思考する。二重人格……一つの体に複数の人格があることだ。それに関して有名な作品は『ジキル博士とハイド氏』だろうか。一応私は「はい」と答えておいた。

「私が……そうなんです。私の中にもう一人の私がいるんです。私よりも強くて……格好よくて……そんな私が」

正直、そういう設定なのかと感じていた。最近の子供によく現れる『厨二病』みたいなものだろうと。

「もう一人の私……『コウ』って言うんですけど、コウはいつも私を助けてくれて。私は運動が苦手なので、いつも変わって貰ってるんですよ」

コウについて皆には秘密にしてるんですけどね、と苦笑いしながら言う。ならば何故私には教えてくれたのか、その疑問が立ち上るがすぐ瑠璃さんは続けた。

「コウのことを隠すのはコウに言われたんです。私が周りから見ても思われないために……でも、もしアイドルをやるとしたら……私は『涼月瑠璃』でやりたいんです。勿論コウがやりたくないって言うならこの話は受けるつもりはありませんでしたが、コウも割と乗り気で……」

少々早口になっていたが、言いたいことは理解出来た。おそらくそういう設定であろうが。

だが、その『コウ』というのに興味が湧いた。

「宜しければいいのですが、その『コウ』さんとお話をさせて貰えますか？」

「あ、はい。分かりました。じゃあ変わりますね」

そういつて瑠璃さんは目を瞑った。すると――雰囲気ガラリと

変わった。

目で見える変化なら、瑠璃さんの髪の毛の一部が黒青くなっていた部分は何故か赤く変化したことだろうか。

まるで別人と対面したかのような錯覚。ここで私は認識を改めた。これは設定ではなく、本当なんだと。

「… ったく、ルリのやつ… あ、すまんね武内さん。アンタはまっつたく悪くないんだ。悪いのはオレのことを一切隠そうとしなかったルリだからな」

姿は同じなのにここまで違うとは… 世の中分らないものだ。

「なあ、武内さん。アンタは『ルリの』笑顔に惹かれたわけだよな？」

「… はい」

「なら、オレとしてはルリを応援したい。だからオレのことは隠してルリのことをプロデュースしてほしいんだ。ルリが… 変なやつだと思われてほしくない。オレがいるせいでルリが邪険にされるなら… オレは喜んで無い存在になりたい」

かつてないほどの真剣な目付き。そこからはどうしても、という願いがこもった眼差しも見える…

… そういえば先程瑠璃さんは、コウさんもアイドルをすることに一応乗り気ではあったと言っていた…

—— 決めた。

「… 瑠璃さん、コウさん
涼月瑠璃さん。アイドルに興味はありますか？」

「… は？」

「貴女『達』なら、絶対に輝くアイドルになれます… いかがでしょう？」

瑠璃さん同様、コウさんにも少なからず魅力がある。そして二人で一人を形成する… 個性を尊重するシンデレラプロジェクトにはぴったりだ。

「… 明日まで、待ってくれませんか？」

「はい。ではまた明日、ここで」

「すみません、ありがとうございます…。 それでは」

いつの間にかコウさんから瑠璃さんに戻っており、とりあえずまた別れることとなった。

前回のとは違い今回は好感触。期待は出来る。

私は内心やりきった感を出しながら帰宅したのだった。

結論から言おう・・・親から許可が貰えた。

これはマジで驚いたね。かなり反対すると思つてたお父さんが割とすんなり許可出すんだもん。理由を聞いたら・・・

——やりたいようになってきなさい。

それだけだった。え、もしやお父さんお母さんつてめっちゃいい人なんじゃ・・・いや元からいい人つてのは知ってるんだけども。

『いやー、ルリが上目遣いでおねだりをして無理やり許可をもぎ取るケースにならなくて良かったなあ』

「なにそのケース!?!いざつてなつたらやらせるつもりだったの!?!」

『まあな、オレもオレでアイドルをやりたくなくなったわけだしさ。なら主人格のルリがそうするしかないだろ?』

「そ、そうだけどお・・・」

現在、私達は下校の途中。つまり、昨日の約束を果たしに来たんだ。言うまでもなく、返答はYes。こちらからも是非お願いしたい、ということも添えてだ。

私はそれと同時に嬉しくなつてもいた。コウが・・・あの私ばかり優先するコウが自分のしたいことを初めて示してくれた。これは何としても叶えてあげたいよね。

「・・・あ、武内さん!」

「どうも・・・瑠璃さん」

『一応時間ピツタシ・・・か?』

みたいだね。でも・・・待たせちゃったのかな?

「それで・・・ご返答のほうは・・・」

「是非、やらせて下さい。よろしくお願いします」

学校でもしないような90度きつちりの綺麗なお辞儀。ふっ、我ながら綺麗なお辞儀だ・・・

「・・・ありがとうございます。では、こちらを」

武内さんからなんかでかい封筒を渡された。そして割と厚い。

「…これは？」

「前々日簡単に説明した『シンデレラプロジェクト』についての資料です。宜しければ、目を通して頂きたいのですが」

「分かりました」

——ほうほう、なるほどね。ふむふむ…うん、理解出来たけど理解出来ないわ。

普通スマホゲームとかPCゲームとか始める時になんか同意するの出てくるじゃん。あれは私達読まないタイプだから…あれ、今は関係ないかな？

「何か質問などありませんか？」

「質問…ですか…」

そうだなあ…

『ルリ、ちよつち変わってくれないか？』

「あ、うん分かった…武内さん、一回コウに変わりますね」

「分かりました」

私は目を瞑り、コウの意識と私の意識を入れ換える…うん、よし。上手く入れ替われた。

「…よっし、ルリからは無いみたいだし、オレから質問だ。美城プロダクションは東京にあるだろ？ならオレ達は必然的に東京に行くことになつちまう…そこでの家はこつちで探す感じか？」

あ、確かに。衣食住が確率してないとアイドルする以前の問題になつちやうよね。

「いえ、こちらの方で用意をさせていただきます。ただ、女子寮ということ、多数のアイドルとの共同生活することになります」

女子寮かあ…それなら大丈夫なのかも…

…待って、私達って今からすぐ東京に行く感じ？転校しなきゃならない感じ!?

「あー…確かにそれもあるな。聞いてみるか…武内さん、オレ達は今すぐにでも東京に行かなきゃ駄目か？」

「いえ、プロジェクト事態の開始予定は来年の4月頃からですから、涼月さんが通っている中学校を卒業してから開始ということになりま

す」

「へえ……」

えっと……今が11月だから……え、後5ヶ月後？

……それまで身体作つとけよってことですか……

「なら、どのタイミングで行けばいいんだ？」

「その時になればご連絡いたします……この事はご両親には？」

「一応アイドルやるぞーっては伝えた。反対はされなかった……が、

一応一度武内さんと会って話をしておくべきだとは思う」

「そうですね……では、今日はもう遅いので後日に。部活等はされているのですか？」

「してないな。だが両親は忙しいから……いや待てよ？ルリ、確か両方とも今週は休み入ってなかったか？」

あ、確か土曜日が休みだったはずだよ。それでお母さんがめっちゃ喜んでたね。『神は私を見捨てなかった!!』とか言ってたよ。

「どれほどだよ……あ、武内さん。土曜日は空いてるそうだよ」

「では、土曜日の午前11時頃にお伺いします」

「?……ああ、分かった」

「では、家まで送りましょう」

あ、なるほど。さりげなく私達を家に送って家の場所を把握しようってことか。

「ルリー、そろそろ戻るぞー」

『あ、うん。分かった』

目を瞑り意識をまた入れ換える……うん、戻ってきた。

「それでは涼月さん。行きましょう」

「あ、はい」

「ところで武内さん。なんでいつの間にか名字呼びに？」

「いえ… 瑠璃さんとコウさんを一緒に呼ぶときにはこちらが良いか
と思ひまして… 駄目でしようか？」

「あ、全然大丈夫です。そういう解釈での名字呼びは全然OKです！」

四

——時が過ぎて、大体あの出来事から5カ月経った。この5ヶ月の間が今までの人生の中で見てもかなり濃いものだったと思う。多分ね。

まず何かから話そうか…。 そうだなあ。 武内さんが家に来たことから。 というか、理由の9割これだね。

…。 武内さんはね、ちゃんと約束した土曜日に来てくれたの。 しかもきつかり11時に。 事前にお父さんとお母さんには武内さんのことについては伝えておいたから迎える準備は出来てたわけなのね。 でも…。 ここからが少し問題だった。

それはお父さんの態度。 土曜日が近づくにつれて徐々に不機嫌になっていったんだよね。 見て分かるレベルまで。 お母さんに理由聞いてもニコニコしながら誤魔化してきたからますます分かんなくて…。 コウにも尋ねただけけど私と同じく分かってなさそう。 結局理由分からず終いで当日を迎えちゃった訳ね。 ま、今でも分かかってないんだけどさ…。

んで、武内さんが家に上がってお父さんお母さんと話してる間…。 私達はなんとなく気まずくて自分の部屋に逃げ込んでゲームをしたのね。 余談だけど、好きなゲームはポケ○ンだよ…。 あ、最近ね！ やっと海外産6Vメタ○ンが!!…。 あーうん、この話はやめとこう。 長くなりそう。 身近にこういう会話出来る人いないからねー…。

…。 オホン、話を戻すね。 まあとにかくずっとゲームしてた訳なの。 そして…。 大体二時間くらいかな？ゲームに全く集中出来なくてなんか怖くなって…。 気になって見に行ってみたの。 すると…。 なんかお父さんと武内さんが意気投合してた。 あれ、お父さんや武内さんってこんなにテンション上げて話せるんだー…。 なんて

考えたほどにね。かなり深く話し込んでいたのかかまだけど、私がその部屋に入ったことに二人は気付かないでいたわけね。お母さんはそれをニコニコしながら見守ってたよ。

——武内さん。家の娘を…瑠璃を、よろしくお願いします。

——はい、必ずトップアイドルにしてみせます。

会話はここしか聞き取れなかった…。けど、これを聞いてから、お父さんお母さんへの恩返しのためにも頑張ろうって改めて決意したんだよね。

次は…トレーニングについても。

アイドルになろうと決意したあの日から、私達はランニングや身体を柔らかくするストレッチ、歌唱力強化のためにカラオケに行ったり、動画サイトで見つけた346プロダクションのアイドルのダンス動画を片っ端から真似し始めたりした。カラオケ以外に関しては全部コウなだけだね…。まあ、それはそれとして。

カラオケはテレビのカラオケ大会とかで使われてる割と厳しい採点するやつを使って最高95点まで行けたのはかなり嬉しかったなあ…。ダンスに関しては、流石運動が出来るコウと言うべきなのか、1ヶ月で一曲のペースで完成させていった。私だったら何年かかるだろう…。

とまあこんな感じなのかな。もっと探せばあると思うけど…。省略しましょつと。

そして今何してるか?…それはね、

——346プロダクションの女子寮前にいるの。

コウはね、昨日ギリギリまでダンスの練習してたから今はスヤアと眠ってる。だから今日は私一人なんだ…。少し寂しいけどね。

東京の高校の受験が終了した今日、武内さんから実家に電話が来たらしくてね。受験で東京に来てたからそのまま説明くらいは受けようかなって。だから制服のままこっちにきたの。

…変に緊張するなあ…。お隣さんとかどんな人になるんだろ…。

「…涼月さん」

「ひあい!？」

後ろから突然声が!?!?! あ、武内さんか。

「す、すみません!?!?! 驚いちゃって」

「いえ、大丈夫です!?!?! コウさんもいらっしやいますか?」

「あ、今コウは少し眠っています!?!?!」

「!?!?! では瑠璃さん、これから女子寮の説明を受けてもらいます。後程コウさんに説明をお願いしても宜しいでしょうか」

「分かりました。宜しくお願いします」

!?!?! あれ、武内さん困惑してる??!?!なんて手を首に当ててるし。

「申し訳ありませんが、私が案内するわけではありません!?!?! 女子寮、ですので」

「あつ!?!?!?!?!」

そっか、そうだよ。そりやそっか!?!?! なら誰が?!

「本日は涼月さんと同じプロジェクトに参加される方に案内をお願いしています」

同じプロジェクト!?!?! シンデレラプロジェクトのメンバーってことかな??!?! どんな人なんだろ!?!?! と考えていると!?!?!

「我が下部よ。そこにいるのが我らが城に住まう新たな住民か? (プロジェクトリーダーさん。そこにいるのが言っていたこれから一緒に女子寮で暮らす方ですか?)」

後ろから突然、一人の女の子の声が聞こえてきたかと思えば!?!?!?!?!?! え、何語?!

「我が名は神崎蘭子!?!?! ふっ、闇に飲まれよ!! (私は神崎蘭子です。宜しくお願ひします!!)」

「ええ!?!?!」

初手に闇に飲まれよって何?!?!もしかしてそういう生物なの!?!

助けを求めようと武内さんを見ても、武内さんは手を首に当ててるばかりで!?!?! え、これコミュニケーション出来る?!?!?! と、とりあえず似たような言葉でコンタクト取ってみよう。確かそんな雰囲気

キャラがいたような… 適当にやってみるか！

「な、名乗られたからには名乗るしかあるまい… 我の名は涼月瑠璃。永い付き合いになるであろうが… 宜しく頼むぞ？」

こ、こんな感じでもいいのかな… ってあれ？ 蘭子ちゃんめっちゃ目をキラキラさせてる…？そして武内さん何驚いた様子でこっち見てんの!?

「そ、そなた！こちら側の人種であつたのか!?(る、瑠璃ちゃん！瑠璃ちゃんって私と同じなの!?)」

「え、えつとお…」

こちら側… あ、アイドルってことかな？

「ンンツ… そうだ。だから我は永い付き合いになる、と述べたのだが… これは訂正すべきか？」

… さらに蘭子ちゃんが明るくなった気がする。

ん、武内さんが耳を貸してと合図してきた… なんだろう。

「瑠璃さんは神崎さんの言葉が分かるのですか?!」

「あ… フィーリングです。コミュニケーションとるならなんとなく同じ話し方をするべきかなーって…」

「な、なるほど… すみません。本日空いていたのが神崎さんだけで…」

「大丈夫ですよ。わざわざありがとうございます」

なんだっけこういうの… 厨二病だったかな？よく分かんないけどね。

「さあ同士よ！我らが城へいざ行かん！（さあ瑠璃ちゃん！私達の女子寮へ行こう！）」

「あ、慌てるな同士蘭子よ。そう急かすでないぞ」

… とりあえず蘭子ちゃんにはこうやって話しておけば間違いは無いよね？

五

また更に時が流れて——具体的には高校にもう入学して、学校生活が始まった頃——私達はとうとう、この女子寮で暮らし始めることになった。

でも、武内さん……いや、呼び方変えるべきなのかな？プロデューサーさんって感じ？……まあいいや、武内さんに部活動は出来れば入らないで欲しい、と言われた。そりやそうだよ。レッスんとかあるんだろうし……やる暇なんてないよね。ま、結局私達が惹かれるような部活動は無かったんだけど。

……ん、あの後どうなったのかって？勿論蘭子ちゃんから色々と案内してもらったり、ここでの決まり事とかの説明を受けたよ。残念ながら蘭子ちゃん以外は仕事とかレッスんとかで誰とも会わなかったんだけどね……

とまあ、さつきも言ったけど今日からここで暮らすのね。お隣さん……誰なんだろう。挨拶はしっかりしないとね。荷物整理は粗方終わったし……うん、行きましようか……緊張するなあ。早く行かないと……ああでも……うーん……

『……なあ、とりあえずベル鳴らそうぜ？もう10分以上お隣さんの部屋の前にいるじゃないか』

「わ、分かっているよお！……でも……」

『あーもうじれつしたい!!さつきと行けよお!!』

「で、でもさあ……」

うう、コウの声が脳に響く……でも確かにこのままじゃ、ダメ……いやでも……でもなあ……

「……ん、部屋の前に誰かいるのー？」

「ふえ!？」

へ、部屋のなかから声が!?… あ、当たり前か…

なんてあれこれ考えてたら部屋の扉が開いて、中から茶色っぽい髪の毛をした私達とほぼ同じくらい… うん、同じくらいの身長の子が出てきた。

『嘘つけ。オレらのほうが絶対身長低いだろうが』

「い、いいじゃん！脳内くらい自分の都合よくしてもさ！」

「… えーつと？」

「あ、ごめんなさい!… そして初めまして！今日から隣の部屋に住むことになります。涼月瑠璃です！宜しくお願いします！」

頭の下げる角度は60度。そして手には手土産の割と高めのお菓子!… これこの女子寮にいる人数分買ったんだよね。引越当日、お母さんが買つとけ、つて言つてそのお店の場所と買うものが書かれたメモとお金をバツと大量に渡されたんだ。使つてみればあらびっくり、お釣りは0円!… 残つたらお小遣いにしようと思つてたのに…

つて、そんなことよりも… お隣さんの視線がさつきからこつちを品定めするかの様にギラギラしてるんだけど… 大丈夫かなこれ。

「… この子が蘭子ちゃんが言つてた子だよな?予想と全然違う!」

「… へ？」

「ああ、なんでもないにや！」

… にや?今にやつて言つてたよね?… 猫?

「オホン… 前川みくにや!アイドルは猫キャラでいくつもりにや!… とりあえず顔を上げてほしいにや」

「あつはい」

あ、みくちゃんの着けてるネコミミ可愛い。

… そしてなんでだろ。まだ観察してるかのような… 疑い?とはちよつと違う感じの見られ方されてる… 気にしないのが勝ちかな。

「… では、私達はこれで… 色々ご迷惑をかけるかと思ひます。改めて宜しくお願いします！」

「宜しくにや!次からは敬語無しでいいよ。同じアイドルの仲間だし

！」

「はい！… あ、うん！宜しくね！」

「じゃ、とりあえずまた後でにゃ！」

その言葉を最後にみくちゃんは部屋に戻っていった。しかも、手を振ってくれて… 普通にいい人だったなあ… 可愛かったし。

つとと、まだだね。まだもう片方のお隣さんがいるもんね。よし、行こう！

『お、もう一人目行ったからもう他の人の部屋の前で止まることはないな！』

「え… あ… その…」

『… だー!!頑張れよお!!』

「… で、でも…」

「同士よ、我が神聖なる空間に通ずる門の前で何をしておるのだ？（溜璃ちゃん、私の部屋の前で何してるの？）」

ら、蘭子ちゃん!?… へ、もしや… いやもしかなくても…

「ねえ、蘭子ちゃ… オホン、同士蘭子よ。そなたがここの空間の主なのか？」

きちんと言葉をこっちに直して蘭子ちゃんに聞いてみる。これちよつと楽しかったり…

『プツ、アツハハハハ!!ど、「同士蘭子」て!!空間の主て!!アハハハ!!』
恥ずかしい… くっ、いつそ殺せ!

「いかにも！そこは我が神域であるぞ！… どうした同士よ。少し顔色が…（そうだよ！そこは私の部屋なの！… あれ、どうしたの溜璃ちゃん。少し顔色が…）」

「な、なんでもないぞ同士蘭子よ！気のせいであろう！」

「そ、そうか…（う、うん…）」

あー恥ずかしさで絶対顔真っ赤だよ… うう、てかいつまで笑って

んのさコウ!!

『ハハハッ…なるほどな、これが受験後のことを頑なに教えてくれなかった理由かあ…ま、逆に考えろよ。知ってるやつがいて良かったってな!』

「…そうだね。ポジティブに行こうか…」

ま、結局は全員にこの手土産渡すつもりだけだね…

「それで、そこで何をしているのだ? (それで、そこで何してるの?)」
「うむ、実はな同士蘭子よ。我らは今日よりそちらの空間…つまり、貴殿の隣に住まうこととなったのだ。その挨拶をだな…」

「なっ…これも、運命の導きか?!? (えっ…すっごい偶然!!)」

「フフツ、そうであろうな。改めてにはなるが…これから宜しく頼むぞ。そしてこれはちよつとした手土産だ。受け取って欲しい」

「な、これは…あの幻の秘宝の甘味…!!! (え、これって…あの中々高くて1日に百個以下しか製造されてないって言われてる幻のお菓子…!!!)」

お、どうやら気に入った様子。やっぱり女の子は皆お菓子好きなんだね…ま、私達も例外じゃないけどさ。

…あ、そうだ。コウのこと…どうしよう。紹介するのは確定として…うーん…

「…それでは、我らはここで立ち去るとしよう。ではな」

『あ、逃げやがった』

「うむ、闇に飲まれよ! (うん、また後でね!)」

…やみのまは挨拶って解釈でいいかな? とまあ、なんとかあったね。

まあそれで、部屋に戻ったわけだけど…つつかれたあ…

『まだ二人しか挨拶してないだろ?…まあ、少しくらい休憩を入れてもいいとは思うがな』

「コウツテヤサシー」

『おう、棒読み止めろよな』

暫く何もする気力なくて…。ここでダンスの練習するって案もあつたけど一応ここは私達だけの場所じゃないし止めたんだよね…。とにかくずっと横になってボーッとしてたの。

そして気付けば外は真っ暗。時間は…。7時!? 何時間ボーッとつてしたの私い…。!!

『…。まあ、今回はオレが声をかけなかったのも悪い。すまなかった』
「んーや、コウは気にしなくてもいいよ…。はあ、とてつもなく時間を無駄にした感じ」

これからどうしようか…。と考えを巡らせていると——こんこん、と三回ノックが鳴った。言わずもがな、ここは私達の部屋。だから相手は私達に用があつてきたのだろう…。誰？

「瑠璃ちゃん！ 迎えにきたにや！」

「ふっふっふ…。今宵の宴への道標となろうぞ！」

…。みくちゃんと蘭子ちゃん？ 迎え？ 宴？…。へ？

『とりあえず行こうぜリ。このまま放っておくのはダメだろ』

「うん、そうだね」

私達は立ち上がって扉を開ける。待っててくれたのは案の定二人。そしてとてもニヤニヤしてる…。何かしたっけ？

「これから歓迎パーティーにや！」

「主役は勿論…。我が同士だ！」

へ、マジ？…。凄く有りがたいなあ…。だけど、これじゃあ今出てる私だけがお祝いされてるみたい。どうせなら…。

「コウの方にも楽しんで貰いたいなあ…。」

…。あ、思わず呟いちゃった。多分そのせいで目の前にいる二人がポカン…。となってる。

「コウ?…それって誰にや?」

「同士の友人か?」

そりやまあそうだよな。突然知らない人の名前出されたらこうなるよね…

『… やっちまったなあ、ルリ。どうするよ』

「都合がいいね。一気にここでやっちやうよ」

少し間を置いて私は告げる。

「実はね… 私、二重人格なんだ」



ここ、346プロダクションのアイドル専用の女子寮は地方からやってきたアイドル達が共同生活をする場である。それはデビュー前でも関係はないのだ。

そして、その例であるまだ開始していないシンデレラプロジェクトのメンバーである『前川みく』と『神崎蘭子』と… まだ、姿は見せてないが『アナスタシア』がこの女子寮で暮らしている。

そこに入ってきたのが新たなシンデレラプロジェクトのメンバーである『涼月瑠璃』。他のメンバーより少し背が低いのが特徴であるか。

当初、みくと蘭子ではそれぞれで瑠璃に対する印象はまるで違った。みくの感想は「ただただ普通の女の子」。言い方を変えれば「典型的なアイドルになるであろう女の子」だった。それこそ765プロの天海春香のようなアイドルを夢見る女の子みたいな。

一方、蘭子の持つ感想は「私の言葉をわかってくれる人」だ。以前住んでいた地域でも蘭子はこの調子。よってコミュニケーションが

取れなくなつてしまった。その結果であろうか、少し避けられていたのだが……。あまり本人は気付いてない様子。ここに来てから避けられてはされないものの、コミュニケーションが相変わらずあまり取れないまま。そこで来たのが瑠璃だ。なんと、瑠璃は蘭子の言いたいことをほぼ分かっているかのよう！しかも同じ厨二病だったのだ……。まあ、これに関しては後程そうではないと気付くのだが。

とまあ、そんな二人に突然の告白。

「実はね……。私、二重人格なんだ」

当然二人は困惑していた。何を言っているんだ瑠璃ちゃんは。そういうキャラでいくつもりなのかな？等々考えていた。

「うん、実際に見せたほうがいいかな？」

突然瑠璃は目を瞑る……。するとどうだろう。瑠璃の髪の毛の青かった部分が赤く変色し、再び目を開ければ青かった瞳は赤に変わっている。ガラリと雰囲気も変わった。

みくは絶句した。当然の反応かもしれない。しかし蘭子はかなり興味深そうに楽しそうな反応を示す。

「あー……。オレがそのもう一つの人格の『コウ』だ。ルリとオレが揃って『涼月瑠璃』ってことになってる。まあ……。宜しく頼む」

照れ臭そうに頭を掻きながら苦笑いをして二人にコウは向き合う。しかし、そこには少し小さな畏怖の念が籠っていたことに二人は気付く。受け入れて貰えるだろうか。変に思われたりしないか等々……。簡単に見破れることが出来た。

二人は顔を見合せ笑い合う。考えてることは同じのようだ。

「改めて宜しくにゃ！コウちゃん！」

「ならば初の邂逅となるのか。では、改めて名乗ろう……。我が名は神崎蘭子！闇に飲まれよ！（じゃあ初めましてだね！一応自己紹介するよ。私は神崎蘭子！よろしくね！）」

「そして訂正するにゃ！これから行う歓迎パーティーは『涼月瑠璃』ちゃんが主役にゃ！」

「今宵の宴はこの先だ。我らが案内するぞ！（パーティーはこの先だ

よ。私達が案内するね！)」

それを聞いたコウ……いや『涼月瑠璃』は……

「^{ああ!!}うん!!」

二つが混ざりあったような奇妙な……でもどこか美しい声で返事をした。

——2XXX年、資格者が誕生せん時、世界は再び現れるこの世の最悪によって支配されるであろう。

これはとある神話の最後の記述だ。その神話のストーリーはまず世界に『邪神』と呼ばれる一つの生命体が生まれるところから始まる。それは『アクマ』と呼ばれる手下を生み出し世界を破滅に追いやっていくのだが……全くもって攻撃等は通用しない。仕舞いには『邪神』側に寝返る人々まで出てくるのだ。

そこで立ち上がるのは5人の戦士。一人は竜人、一人は太陽の巫女、一人はその当時最強の騎士……というように、全員一般人ではない。何かしら持つてる者なのだ。

最初こそ全くコンビネーションもひつたくれもない集団だったが、最後は力を合わせて『邪神』の封印に成功する。

——そう、封印なのだ。倒しきれてないのだ。さらにその後、戦士達は来世に託してそれぞれ自身の持つ力を物質にしてある場所へ封印し、息を引き取ったという。素質のある『資格者』しか扱えない物にして。

まあ、こんな感じのよくあるテンプレの物語のように語られるのだが……ここで不可解な点が1つ。この神話は世界各国に一言一句間違えられずに伝わっている、ということだ。つまり、ギリシャ神話や中国神話のようにその地域から発祥したわけではなく、最初から世界に伝わっていた神話だということだ。故にこれを知っている者はいないと言っても過言ではない。

当初、この話の最後の記述は一部の熱狂的信者を除き全く信じられていなかったのだが……ジャスト2XXX年。何故か『アクマ』が日本の一部の地域で出現し、目撃された事例が発見され、この神話の内容が本当だったと世界は認めざるを得なくなってしまった。

——そして時はその年から三年後。『三角博士』という人物が『ヒーローキー』と呼ばれるそれぞれの戦士達の力を物質化されたものを3つ発掘。その後ヒーローキーの力を理論上最大まで発揮できる『キードライバー』を開発するのだが……作ったドライバー5つのうち2つ消失してしまう。

そして開発した後、博士はその失ったドライバーと共に資格者を探し回り、資格者を三人見つけた。

三人の名前は『真田勝人』『長良翔』『源川士郎』。それぞれ『仮面ライダードラゴ』『仮面ライダーアドミル』『仮面ライダーウインド』となったのだ。

三人はアクマを倒す理由は違えど、出現したアクマに関しては着実に倒していった——

——そして現在、三人はとある者と対峙していた。

見た目は幼い一人の中学生くらいの子供。黒いコートのようなものを着て、頭はフードに覆われ、顔は謎のお面をつけていた。実は度々、勝人に困ったことがあるがあると突然現れてはアドバイスをしてくれていた。

アドバイスをくれるときに言う「じゃ、君にレクチャーしたげよう」という台詞が、勝人の今はいない姉を彷彿とさせていたので、印象はかなり強かった。

「……よくもまあ、私達の部下をこうもあっさりと……」

淡々と、全く驚いてないように三人に対して言う。その声はノイズ

がかかっており、本当の声ではないということがわかる。

先程、ここでは多数のアクマと三人が戦っており、三人はライダーに変身している状態であった。なんとかアクマを蹴散らし、一区切りついたかと思えば……という感じで今に至る。

「部下?… それってどういうことだ?」

理解が未だに追いついてない勝人がかろうじて言葉を出す。当然であろう、今まで然り気無くアドバイスをしてくれていた者が実は敵だったのだから。

「流石だね君… いや、勝人。うん、期待して正解だったかな」

初めて——初めて勝人に対して名前と呼んだ。勝人はこの人物に對して名前を名乗った覚えはない。名乗ろうとしたときには既に消えていた、そんな人物だったのだから。

「もう、これはいらぬね… 久しぶり、かな?」

戸惑いを隠せない三人を余所にその者はお面を外す。同時にノイズも剥がれていく… その顔は——かつてまだ遙かに幼い勝人を庇いアクマに連れ去られ、勝人のアクマを倒す目的としている姉の『真田白』そのものであった。

そして… 彼女はコートの留め具を外し前を開け、右手に手に謎の白い物体を持たせた。

「… あれは… !!」

仮面ライダーアドミルの翔がそう呟く。その言葉によって彼女を注目した三人は… 驚いてものを言えなくなってしまう。

前を開けて見えたのは、紛失したドライバーの内の1つが腰に巻かれている様子。右手に持っていたのは、自分達が使っているヒーローキーの色違いである。つまり、彼女は『資格者』であったのだ。

「いくよ?」

《サンシャインミコ!!》

彼女がキーの起動スイッチを押す。そしてそのままドライバーに差し込んだ。

《セットオン!》

「… 変身」

《ターンオーバー!! ザ・エレメンタルパワー! エレメンタルスマート! サンシャインミーコー!!!》

そしてドライバーのスイッチを押して変身した。

さらに、未だに驚きを隠せてなくて動けない三人に対して彼女は微笑んだ様子で告げる。

「じゃ、君達にレクチャーしたげよう」



「はいカットオオ!! バツチリイ!! 一旦休憩イ!!」

「… ふう、終わったあ…」

現在、私達とはある撮影スタジオにいる。役者として。

その役は… 『真田白』、そしてその白の中にいるアクマの『クロ』役の2つ。前者は私、後者はコウが勤めるという形になっている。しかも両方悪役… ほんと、なんでアイドルデビューしてない私達があんなに悪役やってんだろ。

『なかなか決まってたぜ? ルリ』

「… 余裕だね、コウ」

『そりゃオレの出番無かったわけだしなー』

「… すっごいムカつくー!」

『はいはい、疲れてるルリは怖くねえぞ?』

「ぐぬう…」

はあ、にしても疲れた…。演じるのは楽しいっちゃ楽しいんだけど… うん、疲れる。

「お疲れ様です。涼月さん」

「あ、お疲れ様です。武内さん」

忙しいはずなのに毎回の撮影…。てかほぼ毎日なんだけどね、それの送り迎えをしてくれる。凄くいい人だよ武内さん。

「…武内さん、どうしてこうなったんでしょね」

「…やはり、あの時かと」

「ですよー…」

『てか、それしかないだろ…』

武内さんから頂いたスポーツドリンクを飲みながら、私達はその『あの時』の日について最初から思い起こし始めた。



その日、私達は346プロダクションのとあるスタジオへと向かっていた。いつもなら普通にレッスンを続ける日々だったのに、今回は何故か武内さんから集合がかかってきてたの。凄く不思議だったなあ…。直前まで忘れてたけど。

ん、シンデレラプロジェクトのメンバー？一応現段階の全員とは会ったことあるよ。軽く挨拶した程度だけだね。

とまあ、そのスタジオへ向かったわけだ。割と時間ギリギリで行ってたけど遅れてないよね…？

…なんて考えてた時期が私達にもあったよ。

『…指定された控え室…騒がしいな』

「百パー遅刻だねこれ… あーもう！みくちゃん達に着いていけばよ

「かった！」

『今日の話忘れててレッスン行ってたお前が悪いんだがな…オレも忘れてたが』

「とりあえず入室!!」

今は私の人格だから全力疾走はコウより遅いけど…それでも全力。遅くはないはず!…多分。

「すみません遅くなりました!!」

「あ、瑠璃ちゃんやつと来たにゃ!」

「我が友がこの導きの刻に遅滞するとは…天変地異の前触れか? (瑠璃ちゃんが遅刻するなんて…珍しいね?)」

「Все в порядке…あー、大丈夫ですよ、ルリ。まだ、ですから」

「…うん、皆いる」

『予想通り、だな』

…ってあれ? 武内さんのそばにいる三人…誰だろ。んー…ダメだ。名前出てこない…会ったことあつたっけなあ…初対面じゃなかったなら謝らないと。

「…涼月さん、分かっていらつしやるかと思いますが、遅刻は厳禁です。今回はギリギリなのでなんとかりましたが、次回以降は気を付けてください」

「す、すみません!」

『なんも言えねえなこれは…』

慌てて私達は武内さんに頭を下げる。うう、これは失敗だなあ…初回の仕事から遅刻だなんて…

「んー、ねえねえプロデューサー。その人がさつき皆が言ってた『涼月瑠璃』って子?」

「はい…ああ、涼月さん。この三人がシンデレラプロジェクトの最後のメンバーです」

「あ、初対面なんです…よかったです。えっと、『涼月瑠璃』です。よ

ろしくお願いします！」

多分同年代だろうけど敬語で頭下げて挨拶。これ常識だよ。親しき仲にも礼儀ありつて言う言葉もあるわけだしね。

『島村卯月』です！よろしくお願いしますね！」

『渋谷凪』… よろしく」

『本田未央』だよ！よろしくねルリりん！」

「る、ルリりん…？」

… 三人とも属性バラバラだこれ。てか未央ちゃん、初対面の人に對して渾名つけられるとか凄い。コミュ力カンストしてるよ…

「… 以上の15名が揃いました。シンデレラプロジェクト、始動です」

… うん、とうとう始まるのか。なんか感慨深いね…

「なんだか賑やかだねー。何の集まり？」

突然、出入口からとある女性が入ってきた… あれ、なんだがとっても見覚えがあるぞ…？

『カ、カリスマJKモデルの城ヶ崎美嘉!!』

… ン？なんでかな。未央ちゃんの声とコウの声が重なったんだけど…？

『や、やべえモノホンだ！すげえ… こんなところで会えるなんて!』

「コ、コウがこんなに興奮してるの初めてかも…」

『ったりめえだろ!? オレのダンスの練習で見た動画には城ヶ崎美嘉のもあったんだからな！憧れるのは仕方ないもんだ!』

「そ、そうなのかなあ…」

『んでな、その城ヶ崎美嘉のダンスがな——

とまあ、コウが城ヶ崎さんのダンスについて熱ううく語っていると、いつの間にか城ヶ崎さんは居なくなっていた。あれま… かなり時間過ぎちゃってるわ。

とりあえず私は武内さんに指示されたようにメイクをして頂いて、

順番を待つ。順番は最後から二番目だ。

「それでは涼月さん。スタンバイを」

「はい…… ほらコウ、もう撮影始まっちゃうから止めにして！」

『あー？これからがいいところだつてのによー……』

今日の仕事は宣材写真撮ること。宣材写真つてなあに？つて聞かれても私は答えられないだろうし、コウも答えられないと思う。多分読んで字のごとく、だろうね。

「涼月さんは瑠璃さん、コウさんの二枚を撮って頂くことになります」「了解です」

『オレの分まで撮るのか……』

そして始まった撮影……うう、かなり緊張する……

「笑顔固いよー瑠璃ちゃん！ほら、もっと自然に！」

ひえええ……

「ど、どうしよコウ!!」

『どうしようだったって……あ、そうだ。ルリがスカウトされた時みたいな感じでやればいいんだ』

「え?」

『だからさ、楽しいこと考えればいいんじゃないか？ほら、確か今日あのゲーム、メンテで新たな改装が追加されてたろ?』

「あ、そうだね！」

その娘は私が初期から使ってた娘であんまり一般的には強くないキャラクターだったんだけど……今日めっちゃ強化されるんだ！コウはこのゲームは触れないから私一人でプレーしてるんだけど……よくその情報仕入れたよね。ふふっ、楽しみだなあ……

「お、その笑顔いいねえ！」

「っ!!」

は、やってしまった……めっちゃだらしな笑顔になってると思うんだけど……!?

「はいじゃあ二枚目撮るよー！」

『おっし、変わるぞルリ!』

「え、あ、うん！」

コウの撮影が一瞬で終わって、コウについて皆が不思議に思っ
て聞いて詰めてきて、色々して、最後の撮影まで終了した後、全
員集合での撮影をし終わった後……撮影スタジオにとある初老の
男性がやって来た。

「どうも、武内プロデューサー」

「おはようございます、紀寺原さん」

「ほうほうなるほど……すまないが、さつき撮影した写真を見
せて頂けないかい？」

「……なるほど、もうそんな時期なのですね。こちらになり
ます」

……知り合いなのかな。親しいっていうのはちよつと違
うと思
うけど……

「我が友よ、あの歴然の指揮官のごとき佇まいをしているの
を誰か存じてるか？……そして、我に無理して合わせなくても
よい（瑠璃ちゃん、あのなんか凄そうな男の人が誰か分かる？……
そして私の口調に無理に合わせなくていいよ？）」

「え、あー……分かんないな。それとごめんね。ありがと」

今日は冴えてるのかな。なんとなく蘭子ちゃんの言ってる
こと分かる。

合わせなくてもよいってのは口調のことだよな？そういう
ことにしておこう。

すると、武内さんがこっちを見て手のひらをその人に向け、
私達のほうを向いて話始める。

「この方は『紀寺原監督』です。皆様が一度は聞いたこと
があるろう『仮面ライオン』の監督をしておられます。それ
らを演じる方達は基本新人ばかりで、紀寺原さんの主観
で選ばれるのが有名です。俳優部門以外にもアイドル等
も選ばれていることもしばしばあります。去年もこう
して、アイドル部門やモデル部門等を回っては役者を
探しておられたとか」

なるほどねー、もしかしたら選ばれるかもねー、などと
蘭子ちゃん

と軽く雑談をしていると・・・その紀寺原さんの様子が変わった。

「み、見つけた・・・武内プロデューサー。この娘は？」

「・・・『涼月瑠璃』さんですね。写真が二枚なのは彼女が二重人格系アイドルであるためです」

「二重人格・・・いい！いいじゃないか!!ちなみにその娘のスケジュールは空いているかね？一応出来ている台本を渡しておこう。ああ、撮影は一週間後になる。連絡はそれまでに頼むよ。台詞はほとんど無いし、最初の方は声だけになるだろうからあまり緊張はしないはずだから是非お願いしたい。おっと、忘れるところだった。それでね――

――」

○ ○ ○ ○ ○

そしてなんやかんやあつて今に至る、と・・・はあ、思えばかなり濃い日だったなあ。

私達以外のその日の後？うーん・・・そうだね、卯月ちゃん、凜ちゃん、未央ちゃんの三人が城ヶ崎さんの今度のライブのバックダンサーに選ばれてたことかな？私はこの話でいっぱいだったけど、コウは泣いて悔しがってたなあ・・・珍しいコウだったよ。うん。

「あ、そういえば武内さん。もうデビューのこととかについては考えているんですか？」

「現在、企画検討中です」

「ま、そうですね」

『始まったばかりだしな。こうやって仕事があるのは幸運なことだろうし』

休憩しながらこうやって話していると…

「撮影五分前でーす！」

「あ、もう行かないと！すみません武内さん、行きますね」

『次はオレの撮影かー… 頑張らないとな』

「はい、頑張ってください」

さて、頑張つてねコウ。

… うーん、そろそろアイドル関連で何かしたいなー… なんて、

我が儘かな？

仮面ライダー○の俳優になってから大体一週間。私達はほぼ毎日撮影に勤しんでいた。実際公開するのは4ヶ月後らしいんだけど…季節感を出したいんだとかなんとかでこの時期に撮ってるんだって。いやまあそれは構わないんだけどね？台詞自体そこまで難しくないし、寧ろ楽しいレベルなんだけど…うん、疲れる。

さらにね、いつもやってるダンスレッスンやボーカルレッスンに私達だけプラスして、『演技指導』というものが入ってる。これは単純で、今現在そっち方面の活動してるからその指導って感じ。まあそりやそうだよな。監督さんに選ばれたわけだけど、演技に関してはお素人なんだし。当たり前だけど、最初はかなーり怒られたりしたんだ…てか今でも怒られたりするけど…でも、最近は大分マシにはなってきたと思う。

んで、レッスンが重なるものだから寮に帰るのが8時とかその辺り。撮影がある日は9時とかその辺りまでかかる時がある。帰ってからも学校の授業のための予習やら課題やらもあるからほぼ寝れなくて…昼休みとか使ってなんとか睡眠時間稼いでる感じ。

…まあ、きついただけじゃなくて楽しめてる部分もあるからいいんだけどね！私達以上に頑張ってるアイドル…例えば今度の大きいライブに出る城ヶ崎さんのバックダンサーに選ばれた卯月ちゃん、凛ちゃん、未央ちゃんだね——そんな人たちは沢山いるわけだし、コウも頑張ってるんだし、私も頑張らないといけないよね！

…でも疲れたなあ…『ふ』が食べたい…

「ストップ… 瑠璃、集中切れてるぞ！」

「あ… はい！すみません！」

『おいおい大丈夫か？疲れるんじゃないのか？』

おつといけない…ここは踏ん張りどころ。頑張らないと！

「よし、行けますー！」

「…はあ… 瑠璃は今日ここまでだ。明日撮影だろう？ しっかり台本を読み込んでおくように…」

「え、でも…」

「次！ええと… コウ！出てこい！」

『っしやあ！変わるぞルリ！』

「あ、え、ちよっ！…………… うし、やるか！」

… 強制的に変わらされた。いや確かにこのままだったらコウが指導してもらえないもんね。しょうがないね…

○○○

ある日、346プロに所属しているトレーナー——通称メイキングトレーナーは唐突にとある通達を受けた。内容は極単純、これから俳優デビューする新人アイドルの演技指導をしてほしい、というものであった。

彼女の仕事はトレーナーであるが、トレーナーはトレーナーでも俳優部署のトレーナーであり、デビューしたての新人等を指導する役目を担っていた。メイキングトレーナーのメイキングというのはそこから来ている…らしい。

彼女自身、こういつた感じで違う部署の人間に指導するというのは初めてではない… が、やりたいとは思っていなかった。深い理由は彼女の経歴にあるのだがここでは省略しよう。要は、演技にやる気がない人を担当することが多くてつまらない、ということが原因である… ということだ。

仕事である以上仕方がないとはいえ、こっちだってやる気もなくなってしまう。

「… またか」

思わずこう呟いてしまったのは仕方がないのだろう。上司に気付

かれなかったのが幸いして何も言われなかったが。

見ると、指導は30分後からだという。急に決まったらしいが、もっと早く報告してほしかった…。なんて思いながらも彼女は指定された場所へと向かっていった。

「す、涼月瑠璃です！よろしくお願いします！」

「ああ、よろしく」

… 驚いた。今回の自分は良い子を引いたらしい。

今までは最初からやる気の無さが感じられるやつだったからこれはこれで新鮮であった。

ふと、彼女が涼月瑠璃の資料を覗いてみると…

『『二重人格系アイドル』？』

そう記載されていた。ああそういういえば、アイドルというのはキャラが大事だとどこかで聞いた覚えがある。この瑠璃って子もそうなのだろう。しかし二重人格か…と考え込んでしまう。態度がいいだけに少し心配してしまうのだ、この子のこれからの芸能界での人生を。

「あ、はい！そのもう一人がコウっていうんですけど…」

「… へえ、ならそのコウとやらにも挨拶させてくれないか？」

「分かりました！」

そう言い、瑠璃は目をつぶる。

—すると、雰囲気ガラツと変わった。

髪の一部が黒っぽい赤に変色し、再び開いた目の瞳は瑠璃色から紅色へ。まあ彼女は『へえ、最近の子はキャラ作りでこんなになるのか、すごい』程度にしか考えていなかったのだが。

「… ふう、さつきルリから紹介を預かった『コウ』だ。よろしく頼む」
「あ、ああ」

先程の様子とは全然違う。しゃべり方も雰囲気も目付きも…だが、変という訳ではない。少なくとも彼女はそう感じた。

「じゃ、時間も限られてるから早速レッスンをするぞ」

「了解… つとと、忘れてた… …… よし、よろしく願いします！」

「戻ったのか。まあいい、始めるぞ！」

彼女は試しに一回その役に合わせて演技させてみたが… 案の定だが、ドが付くレベルの素人であった。それはコウも同様であり、やる気だけは感じられたが… というのが感想であった。

その日はあまり成長することなくレッススが終わり、解散となってしまった。

——そして、二回目のレッスンのある次の日。

「… なにがあつた？」

瑠璃とコウ、二人の演技力が格段に上昇していたのだ。下手な駆け出し俳優よりは上手い… そう感じるレベルにまで。

「昨日ですか？昨日は… 台本をかなり読み込んだりしただけですね」

それだけでここまで演技力が格段に上がるなら誰も苦労してないだろう… だが、実際に瑠璃とコウの演技力は上がった。

「(面白くなってきた…)」

彼女は思わずニヤけそうになる… が、なんとか耐えた。

「鍛えればこいつは凄い役者になれる。アイドルという枠組みに置いておくには惜しい人材だ…」

少し調子にのり、本来の役とはまた違う趣向の役の演技させて指導したりと着実に瑠璃とコウを鍛え続けていた。

——時は移り撮影本番。本人達には言わずに彼女はこっそり見に来ていた。撮影は1話目なのであまり出番はないわけだが、それでも構わないと思っていた。とにかく、久々に本気で指導したあの瑠璃とコウの晴れ舞台を見たいと感じていたのだ。

そして彼女らの演技するシーンになったとき……圧倒された。役柄は悪役でリーダー的な存在であるため、それに応じたカリスマ性のようなものが必要なのだが……見事にそれを引き出していた。彼女が軽く辺りを見渡すと、他の出演者や監督達が驚いているのが一目で分かった。

「(どうだ、『涼月瑠璃』は。こいつはまだまだ成長するぞ)」
彼女は満足そうにそのままスタジオを去っていった。

「思えば、まだ仕事を止めないでこうして続けてるのもあいつらのお陰なのかもな」

本日のレッスンが終わり、彼女らが去ったレッスン場を見てふと眩く。因みに、まだ瑠璃とコウを俳優の道へ引きこみみたいと考えていた。

「ふふっ、さてどうやってこっちに來させるか……」

そう言いながら彼女は帰路へ着く。その足取りはとても軽そうなものだった……と、見た人々は後に語った。

今日は撮影、そしてレッスンは完全にお休み。とっても貴重で珍しい日だ。普通なら、休養を取ったりゲームしたりして過ごすんだけど…今日は、今日だけはいつもと違う。何故なら――

「…ここが卯月ちゃん達が今日踊るんだあ…」

「世にも凄まじき波動が感じられる…（すごい大きいね…）」

――今日は、特別な日なんだから。

会場には始まる前から外にかなりの人達がいた。その数…おおざっぱに数えても千人は超えてると思う。今は物品販売中でもうこれでもか！っていうレベルで人が集まっている。私達？もう既に買っているもんね！フフンツ！

「にしては…買いすぎだと思うにや…」

「そうかな…観賞用、保存用、布教用の三つは必要だって偉い人が言ってたよ。それに買ったのも団扇とライブで使うサイリウムぐらいだし」

「だからと言って同じ団扇三つずつは必要ないと思うにや」

勿論家族に布教するために余分に買ったからね。しかもコウは何故か城ヶ崎さんの団扇だけは絶対買えって言ってたしね…って、お？みくちゃんと…かな子ちゃんと智絵里ちゃん？皆から外れてどこか行ってる？

「ねえねえ、どこ行くの？」

「うん、卯月ちゃん達見に行くの！」

「涼月ちゃんも行く？」

「ん…行こうかな。コウ、良いよね？」

『勿論だ。最近あんまり会ってなかったしな… 激励くらいはいいだ

ろ』

「おっけ！行こう！」

○○○

現在時刻は十二時過ぎ。コンサート開始までそれなりに時間はあ
る状態であるはず…。なのにも関わらず、控え室にはもう沢山のス
タッフさん達が駆け回っていた。撮影の時にもスタッフさんはい
たっちゃあいたんだけど…。別物だねこれ。

「… あ、ここかな？」

「あ、ホントだ」

「ふ、ふん！どんな感じか見てやるにや！」

対抗意識かな？…。 まあ多分そんな感じだろうけど。

「気付かれないようこっそり入るにや…」

「は、はい…」

…。 おろ、武内さんの声。プロデューサーとして卯月ちゃん達に激
励かな？…。 なんてかな、急に私なんかを激励していいのか少し不安
になってきた。

いやコウはいいんだよ？ダンス上手いし私なんかよりずっと凄
いからね。でも私は…。 私には個性っていうのがないからね。精々
ゲームがちよつち出来るって程度だよ。でもその程度…。 なんだよ
ね…。

「——ほら、涼月ちゃんも！」

「ふあえ？」

「卯月ちゃん達に一言言うために来たんでしょ？」

「あ、えっと…。 あの…」

あーこれも皆言った感じだ…。 だったら私達も言わないとだよ
ね？

えっと…。 なんて言おうかな。今まで練習は見られなかったけど
——これは長すぎる!!ええとそれじゃあ…。

『… ルリ、皆困ってる。言うなら早く言おうぜ?』

「わ、分かってるよ！… えっと…」

『はあ… ただ一言、「頑張つて」だぞ？オレを言うから… な？』

「一緒には？… うん、分かった」

私は軽く… ほんの一瞬だけ目を瞑る。完全にコウと入れ替わるものじゃなくて、心を一つにする… みたいな簡単なもの。

そして—— 私達は告げる。

『頑張つて！』

「！！！！」

… あれ、どうしたんだろ三人とも。てか武内さんまで驚いてる？

「い、今ルリリン… コウルンもいたよね？」

「は、はい… 赤と青が混ざってました…」

「混ざってた… のかな…」

なんて言ってるんだろ… うっすら聞こえたけどコウルンて…

いやコウルンて。

『… 笑うなよルリリン』

「いや笑ってないけど… とりあえず戻ろうよ。邪魔になっちゃうし」

「あ、うん。そうだね」

「は、はい」

「… 一体何が起こったのにや… ?涼月チャン自身は分かってないみたいだけど…」

○○○

ライブの感想は… ただ一言、圧巻だった。会場で響き渡る歓声、無数のサイリウム、その中で笑顔で踊り歌う先輩アイドル… そして、卯月ちゃん達。人間ってすごいって思ったときは本当にすごい、しか出てこないものなんだって初めて知ったよ。

いつか私もコウも……こういったステージに出るのかな。出たいと思う反面、怖いという震えが沸き上がってくる……

気付けば私達は寮に帰っていた。暫くの間ゴロゴロしてたりゲムしてたりしたんだけど……まだライブでの興奮が収まる気がしない。

よしそうだ。レッスンしに行こう。なんか今日はそんな気分になってる。

「コウ、これからレッスンしに行きたいんだけど……いいよね？」

『オレもそろそろお前に同じことを言おうと考えてた。さ、行こうぜ！』

たった今、私達には目標が出来た。

それは——まずは卯月ちゃん達に追い付くこと。勝手にライバル的な感じにして申し訳ないけど、それは許して貰おう。だって、置いていかれるのだけは嫌だから！

『芸名』ですか?」

「はい」

あの卯月ちゃん達のライブからある程度日にちが経って、レッスンやたまにある撮影に明け暮れている日々を送っているときに私は武内さんにそう告げられた。

…え、なんで芸名?

「身バレしたくないとか、インパクトのある名前にしたい、等々多数の理由で様々の芸能人の方々は芸名を作ります。勿論、作らない方もいらっしゃるんですが…涼月さん、貴女はどうされますか?」

んーまあ確かに俳優さんとかは芸名だよな。文豪とかだつてペンネームとかだし。

…コウはどう思う?

『どうつて…別にそのまんまでいいんじゃないか? 前いた孤児院の院長が付けてくれた大切な名前だろ?』

うん、この名前は割と本気で気に入ってる。瑠璃色って私好きだし、私の色って感じもするから。

でも…でもね?

「そこにコウは入ってないような気がする…」

「…涼月さん?」

「はいいい!? な、なんでもないですよ!!」

「…?」

…つてあれ? そういえば他の人から芸名にするか聞かれたなんて話は聞かないなあ…私だけ? なんてだろ…

「二応ですが、このプロダクションに所属している全員には同じ質問をしています。今回、涼月さんは既に俳優業をしており、そこで名前が入るため早めに確認しておきたかった次第です」

お、おう…… さりげなく心読むね武内さん。

芸名…… かあ。

「…… とりあえず、考えさせて頂けないでしょうか……？」

「申し訳ありませんが、期限は今週末までです。有無関わらず出来るだけ早めに言いに来てください」

「分かりました。失礼します」

『おいおい、保留にしちまったけどいいのか？ 後で締め切りに追われるとか面倒だぞ』

私が学校で締め切りに間に合わなかった事ってある？

『…… ねえな』

そういうこと。

それにしても…… 何か無いかなあ。

コウは『私』だけど「私」はコウじゃないし、逆もそう。哲学の域に達してる気がするけど…… まあ簡単に言えば「瑠璃」という私は『コウ』ではないってことなただけど…… あれ、更に難しくなった？

…… とにかく、何が言いたいのかって言えば《涼月瑠璃》は「私」の名前であって『コウ』の名前じゃあ無いってこと。『コウ』にはコウって名前があるからね。でも「私」と『コウ』揃って《涼月瑠璃》なんだよね…… あれ？ なんかおかしいぞ？

…… オホン…… 仮に、私が実名でアイドルデビューしたとしよう。そしたら「私」は有名になるだろうね。でも『コウ』は？

きつと世間はコウを「瑠璃」として見られると思う。『コウ』じゃなく。

二重人格だなんて初見で思うわけないもんね。

世間にもコウはコウとして見てほしい私としては芸名は考えたい。
だけど… だけど…
!!!!

「私にセンスを下さい…!!!」

私は壊滅的なセンスだったよ… 武内さん…

思い付いたのはどれもなんか良く分かんない感じになってしまっ
てる。なんだよこの『赤青』って。名前にこれはないね。

コウってなんか赤っぽいから赤で、瑠璃色って青っぽいから適当に
足したのがこれ… なあにこれ。

『… なあルリ、そんなの考えなくていいんだぜ？ お前が言いたい
ことは理解は出来るが、オレは大丈夫だ。お前はオレ、オレはお前な
んだからな』

… でも、

『さっきも言ったが、お前には「瑠璃」という立派な名前があるんだ。
それで十分じゃないか？』

… うん、確かにコウの言う通りかもしれない。でもね… こ
れは私の我が儘だよ。

『我が儘？』

コウにもね、色々見てほしいんだ。アイドルの世界… をね。だか
らそこにコウのいた痕跡を残したいんだ。

… ダメ、かな？

『… しゃーねえ！ そこまで言うならもう何も言わねえ。ありがと
な、ルリ！』

うん、ありがとコウ！… さあて、行こうか！

『は？ どこに？』

決まってるじゃん！ 多分、シンデレラプロジェクトの中で一番セ
ンスと語彙力があるであろうあの人のとこだよ!!

「…なるほど、それで我のところへ来たと言うわけか(い、一番センスある、かあ…えへへ)」

「うん、お願い出来ないかな蘭子ちゃん」

「よかろう！ 同胞のために我が力、存分に使うがよい!!(任せてください!!)」

『なんだ、蘭子のことだったのか。確かに語彙力っー点じゃあ多分このプロジェクト一番だな』

そういうこと。蘭子ちゃんは普段から日常的には全然使わない語句を使って話すからね。前は私も合わせてたけど結構ついていけてなかったし…

蘭子ちゃんなら私の底辺のセンスよりも確実に上の案を出してくれるはず…!!!

——その結果がこれだよ…ってね。

蘭子ちゃんが厨二目線入ってること割とマジで忘れてたよ…漢字表記でカタカナ読みはちよつと…ね？

途中で蘭子ちゃんにも指摘したらあ…って顔されてなんか謝ら

れちゃった。ノリノリになってたもんね…。うん、仕方ないよ。

はあ…。どうしよつかなあ…。

『…ん？ 待てルリ、あれに書いてるやつ…。なんてどうだ？』

「…え？」

「事務所メンバー突撃訪問ってね！ さあさあルリリン、コウルン！

自己紹介宜しくう！」

「こら未央、瑠璃とコウ、戸惑ってるでしょ？ いきなりは厳しいって」

「そうですよ。普通は戸惑っちゃいますからね」

本日はシンデレラプロジェクトの頑張りますーみたいなインタビュー動画の撮影日。どうやらカメラを回すのはこの前ライブに出たあの三人みたいだ。

既に武内さんには芸名に関して報告済み。今日から私達はこのプロダクション内だと名前が変わる。

「ううん、大丈夫だよ」

「そうだよね？ コウ。」

『当たり前だろ？ いつでもいいいぜ』

うん、一緒に、ね！

『『涼月紅瑠璃』です。まだまだ未熟ですが、宜しく願いますね！』